令和七年度

社会人特別選抜入学試験問題

地域創生学部　地域創生学科
地域文化コース　小論文

注意事項

一　試験開始の合図があるまで、この冊子を開かないこと。

二　問題冊子（十頁）には、解答用紙（二枚）及び下書き用紙（二枚）が挟み込んである。試験開始の合図があったら、直ちに中を確かめ、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出ること。

三　問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入すること。

四　解答は、すべて解答用紙の所定欄（縦書き）に記入すること。

五　句読点は、一字と数えること。

六　試験室で配布された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰ること。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

次の文章を読んで、問題一と問題二に解答しなさい。

問題一　文章の内容を要約しなさい（四〇〇字以内）。

問題二　体育の授業でスポーツをする意味について、スポーツの内と外では大切なことが異なるという筆者の意見を踏まえた上で、あなたの考えを述べなさい（六〇〇字以内）。

これは数年前に、ある学生の教育実習を参観したときの話です。小学校の三年生か四年生の体育の授業で、バレーボールのルールを変形させたゲームが行われていました。授業の前半では、チームごとの練習に熱心に取り組む児童の姿が見られ、とても充実しているように感じられました。ところが、授業の後半にいざチーム対抗のゲームを始めると、あるチームの雰囲気が一変しました。その様子を詳しく描写してみます。

児童Aは、同じチームの児童Bがボールをうまくキャッチできないたびに、「なぁんで、取れないんだよぉー!!」と、地団駄を踏んで激怒しています。また別の児童Cは、「Bちゃんはボール取れないから、ここにいて!」と言って、児童Bの腕を引っ張って、コートのすみに立たせています。それでもゲームがうまく運ばないと、児童AやCは、「Bちゃんと一緒のチームじゃ勝てない!」とまで言い出す始末です。その頃には、担任の先生もマズいと気づいて、そのチームに個別に指導をし始めていました（Bちゃんが「体育ぎらい」になっていないとよいのですが……）。

もちろん、このような状況では、その児童AやCに、チームワークの大切さや、そういうふうに言われてBちゃんがどう思うかなどを指導することが一般的だと思いますし、それはそれでとても重要なことです。その児童AやCがそのまま大人になったら、間違いなく大変です。

ただ、そのような児童AやCの行動から少し視点を変えて、ここであえて考えてみたいことは、そもそもスポ

ーツには、そのような残酷な側面が初めから含まれているのではないか、という点です。この事例には、スポーツと「体育ぎらい」の関係を考えるためのヒントがいくつか含まれていると思います。順を追って確認してみましょう。

まず考えてみたい点は、スポーツと「勝つ」ということの関係についてです。なぜ「勝つ」ことが問題になるのかと言えば、上述の児童ＡやＣの発言はすべて、彼らがゲームに「勝つ」ことを求めているからこそ、出てきたと考えられるからです。

では、スポーツにおいて「勝つ」ことは、一体どのような意味を持っているのでしょうか。これについて、みなさんはおそらく、「勝てばいいわけじゃない」とか、「勝つことよりも大切なことがある」といった言葉を聞いたことがあると思います。これらは、スポーツには「勝つ」ことよりも重要なことがあるのだから、たとえ勝てなくとも、その重要なことを学んだり考えたりすべきだ、という主張です。この「勝つことよりも重要なこと」には、「人としての成長」などが想定されているのかもしれません。（中略）

ただし、スポーツにおいては「勝つ」ことが本質的に重要な意味を持っているという主張もあります。これはとても面白い議論なのですが、スポーツ哲学を研究した川谷は、次のような例を挙げて、スポーツにおける「勝つ」ことの重要性を示しています（川谷茂樹、二〇〇五年、『スポーツ倫理学講義』、ナカニシヤ出版）。

それは、サッカーの試合中に、ピッチ上の選手全員が踊り狂ったらどうなるか、という思考実験です。この話を初めて読んだとき、私は電車のなかにいたのですが、そのシーンをリアルに想像して思わず噴き出しそうになってしまい、とても恥ずかしい思いをした記憶があります。だって、サッカーのピッチ上で、選手がみんな踊り狂っているんですよ？　面白すぎます（えっ、そうでもない……？）。

この例で川谷が示そうとしたことは、要するに、踊っている選手はルールに違反しているわけではないけれど、やっぱりサッカーをしているとは言えないし、むしろ、サッカーというゲームを破壊しているということです。

そして、このことが明らかにしているのは、少なくともサッカーというスポーツのゲームを成立させるためには、選手みんなが「勝つ」ことを目指してプレーしなければならない、ということです。この意味において、スポーツでは「勝つ」ことが決定的に重要なわけです。

そのように「勝つ」ことが重要だからこそ、スポーツには「競争」が不可欠の要素として登場します。この要素は、「体育ぎらい」にとっては天敵（！）と言えるかもしれません。ここで、敵の正体を詳しく見ていってみましょう。

「体育ぎらい」に限らず、体育の授業においてスポーツ種目を実践するときに、他者と競争することが苦痛な人は少なくないと思います。なぜなら、競争は多くの場合、他者との優劣に関する比較を意味しているからです。たとえば、小さい子どもたちが野原でかけっこをしていても、この優劣に関して大きな問題はあまり起こりません。しかし、それが学校の校庭で、しかも「ヨーイドン」のかけ声が響いた日には、走ることが一気にイヤになってしまう子が出てきます（徒競走ですね）。

この例は、二つのことを私たちに教えています。

一つは、そのような自然発生的な遊びを、場所や時間に関する規則、すなわちルールによって区切ることで、スポーツが成立しているという点です。野原でのかけっこは、どこがスタートでどこがゴールかもよくわかりませんし、そもそも、それがかけっこなのかも明確ではありません。だから、いつの間にかそれが鬼ごっこに変わったりもします。それに対して、スポーツはかけっこの「いい加減」さを、もっと「ちゃんとした」ものに変えます。つまり、スタートとゴールの場所を一律に決め、その上で、参加者全員が同時にスタートすることを求めるわけです。しかも、そのタイミングを少し間違えただけでルール違反（フライング）になり、そこに参加する資格さえも奪われてしまいます。それほどまでに、スポーツのルールとは厳しいものなのです。

また、かけっこの例が私たちに教えているもう一つのことは、その厳格なルールとかかわっています。より正

確に言うと、なぜスポーツにはそのように厳格なルールが必要になるのか、という問いが、この例を考えることから浮かび上がってきます。端的に言うと、その理由は、競争を公正に行うためです。ではなんのために、競争を公正に行う必要があるのでしょうか。それは、誰が速いのかや強いのかを厳密に決定するため、つまり、誰が勝ち、誰が負けたのかを、明確にするためです。やはりスポーツでは、「勝つ」ことが重視されているのです。

以上のような競争の問題は、ほとんどのスポーツ種目に当てはまりますし、はじめに挙げた体育授業の例なども同様です。野原で友達と二人でボールを投げて遊んでいるときに、その友達がうまくキャッチできないからといって激怒する人は、あまりいないと思います。逆に言えば、そこにスポーツとしてのルールが存在しているからこそ、キャッチできないことが「ミス」や「失敗」になってしまうわけです。これらのことからわかるように、スポーツでの勝敗を明確にするための競争は、そこに参加している人の技能の優劣を、残酷なまでに浮き彫りにします。

弱肉強食とも言えるスポーツのこのような特徴は、プロのスポーツに目を向けてみると、より明確に理解することができます。アマチュアとプロのスポーツ選手との違いは、もちろん技能のレベルをはじめいろいろとあるわけですが、まずは、スポーツをすることによって生活をしている、つまり、お金を得ているということです。

たとえば、プロのスポーツ選手は、自身のパフォーマンスの出来映えによってお給料が決まります。プロ野球選手の年俸がいくらアップしたとかダウンしたとかは、スポーツニュースの話題になったりしています。あれは、前のシーズンのプレーがどれくらいよかったか、またどれくらいチームに貢献したかによって決まるわけです。もっとわかりやすい例で言うと、相撲では取り組みが終わった瞬間に、勝った人にお金（「懸賞金」と言います）が手渡されていますし、ボクシングでも、いわゆる「ファイトマネー」といった形で、やはり勝った選手にお金が渡るようになっています。

（なんだかお金の話ばかりになってしまいましたが……）そのお金は、選手のプレーの出来映え、つまり技能の優劣に応

じて支払われているという点が重要です。このことは、次の結果を必然的に導きます。すなわち、技能の低い人にはお金は払われない、もっとシンプルに言えば、プロスポーツでは生きていけないということです。プロスポーツの世界は、まさに弱肉強食なのです。

そのようなスポーツの残酷さは、必ずしもプロの世界に限ったことではありません。たとえば最近では、学校でよく行われているドッヂボールが話題になることがあります。知らない人はいないと思われるほど、日本では小学校などを中心に、広く行われてきたドッヂボールに、ある問題が指摘されています。

その趣旨はだいたい次のようなものです。ドッヂボールは、ボールをキャッチすることや避けることが苦手、つまりは運動の得意でない人をターゲットにして、ボールをぶつける極めて野蛮なゲームである、というものです。確かに、ドッヂボールにはそのような側面があります。ボールを投げたりキャッチしたりすることが苦手な人にとっては、避けて逃げ続け、最終的にボールをぶつけられるだけのゲームだとも言えます（そもそも、「ドッヂ＝dodge」は「避ける」という意味ですしね……）。

そのような経験をしたことによって、ドッヂボールが嫌いになった人も、決して少なくないと思います。そう考えてみると、確かになんでドッヂボールなんかを、全国の子どもたちがずっとやってきたのか、不思議に思えてきます。

個人的な見解では、ドッヂボールが、ボールを投げるという基本的な運動と、それによってボールを相手にぶつけるというシンプルなルールで構成されているために、ここまで広まってきたのだと思います。そして、そのようにシンプルであるからこそ、弱肉強食の特徴がハッキリと表れてしまうのだと言えます。

いずれにしても、ドッヂボールのような多くの子どもが遊ぶスポーツでさえも、「うまい＝強い」人たちが「楽しみ＝生き残り」、「苦手な＝弱い」人たちが「イヤな思いをする＝排除される」活動になってしまうこと、より端的に言えば、弱肉強食の論理に支配されてしまうことは、確かなようです。そこでもやはり、「勝つ」ことが

最も重要なことと考えられているわけです。だからこそ、「負けた＝弱い」人の苦い経験は、それだけ強烈なものになると考えられます。

体育の授業でそのような経験をした人が「体育ぎらい」になることも、まったく不思議ではありません。はじめに挙げた小学生の例は、あくまでもほんの一例ですが、実際に同じような事例は、いくらでも挙げることができます。運動会などで行われるクラス対抗リレーなどは、走ることが苦手な人にとっては、まさに地獄のようなイベントかもしれません。スポーツの弱肉強食という特徴は、ときとして「弱いモノいじめ」のような効果を発揮してしまうことがあるわけです。そんな経験をしたら、そりゃ誰だって「体育ぎらい」にもなりますよね……。

ところで、先ほど挙げた、サッカーの試合で選手が踊り狂うという思考実験は、もう一つのことを示唆しています。それは、スポーツの内と外では大切なことが異なっている可能性があるということです。改めて確認しておくと、スポーツの内側、つまりゲームにおいては、「勝つ」ことを目指すことがそこに参加する人にとっての義務とすら言えました。そうしないと、そもそもゲームが成立しないからです。

しかし、それはスポーツの外、つまりゲーム以外の状況では必ずしも当てはまるわけではありません。スポーツの外側、たとえば学校や仕事場、または家庭で私たちが生活しているときに、「勝つ」ことは必ずしも最も重要なことではありません。むしろ、友達や同僚、そして家族とは、競争ではなく、協調して活動したり生活したりすることが求められるはずです。そういう意味では、スポーツは私たちの社会や生活において特殊な活動だと言えます。（中略）

ただし、スポーツの内と外で大切なことが違うのだとすると、一つ問題が起こりそうです。つまり、もしそうであるならば、私たちがよく言ったり聞いたりするような、「スポーツを通して人を育てる」ことは本当にできるのだろうか、という疑問が浮かんできます。もしスポーツの内と外で大切なことが別だとするなら、その内と外の間には、つながりはないことになってしまうのではないでしょうか。とすると、そもそも体育の授業でスポ

ーツをやる意味は、一体なんなのでしょうか？

（坂本拓弥『体育がきらい』筑摩書房、二〇二三年　一部改変）